

愛とサイエンスの融合 ホメオパシー

愛と科学性を兼ね備えたホメオパシー療法の可能性を追求するとともに、日本や世界の抱える様々な問題を、既存の科学・学問体系にとらわれず、もっと大きな普遍的な愛の視点から考えていこうというテーマのもと行われた、日本ホメオパシー医学協会の JPHMA コングレス。熱気あふれるその模様をレポートいたします。

写真提供 / 日本ホメオパシー医学協会 写真 / よねくらりょう 取材・文 / 伊藤啓子

レメディーとは

What is Remedy?

レメディーは、植物・鉱物・昆虫など原物質がなくなるまで薄め・叩く、「希釈・振盪」という特別な方法によって作られます。例えば、玉ねぎをきざむと涙と鼻水が出てきます。その玉ねぎをうすめ、叩き（希釈振盪技術）、玉ねぎの物質が全くない状態まで薄め活性化し、その液体を砂糖玉にたらしめます。これをレメディーと言います。花粉症で鼻水が涙目になる時に、同じ症状となる玉ねぎを希釈振盪したレメディーをすることで、自己治癒力が触発され、自らが花粉症を癒して行くことができるのです。



明治神宮にて、 1400名が参集

一般財団法人日本ホメオパシー財団日本ホメオパシー医学協会（JPHMA）は、平成25年に設立15周年を迎え、第14回 JPHMA コングレス（日本ホメオパシー医学協会学術大会）を、東京・明治神宮の森、明治神宮会館にて2日間で1400名が参集し開催しました。由井大会長をはじめとする JPHMA 認定ホメオパスたちの症例発表や海外・国内からの来賓講演が加わり、日本の復興に向けて、日本人が今、知らなければならない真実や日本の良さ、また、自然生活をすすめるホメオパシーの生き方のすばらしさを様々な角度から体験し、一人一人の心に触れるすばらしい大会となりました。

ホメオパシーとは

What is Homeopathy?

ホメオパシーは、今から200年前にドイツの医師ハーネマンが確立させた自然療法です。近代西洋医学のように、症状を抑える療法ではなく、症状は体や心から必要が出て出ているのであり、症状を出し切ることが治癒につながるという考え方です。「同じような症状を出すものがその症状を癒す」という「同種の法則」に基づいています。日本にも喉がヒリヒリする時に、ヒリヒリするしょうが湯を飲むことも同種です。ハーネマンは同種だけでなく「症状を起こす物質を天文学的に薄め、活性化（希釈・振盪）」し、体に有害な物質のない情報パターンだけを与えることにより、副作用なく治癒に導くホメオパシー療法が完成しました。

キューバとインド 海外のホメオパシー事情

海外来賓としてキューバのグスタボ・ブラチョ博士（キューバ国立フィンレイ研究所）とインドのR-Kマンチャダ長官（インド政府ホメオパシー中央研究評議会議長官）が、各国におけるホメオパシー事情について言及され、キューバ（国民1100万人のうち900万人がホメオパシーを利用）でのホメオパシーによる感染症予防の研究と成果について、インド（インドの人口の48%がホメオパシーを利用し、30万人以上のホメオパスが活躍する）では西洋現代医学、アーユルヴェーダ医学とともに、ホメオパシーが国の第一医学と位置づけられているということなどを発表されました。また、今回キューバ大使、インド大使代理公使が、由井大会長と面談、ホメオパシーの普及に両国から支援の約束が交わされたとのこと、さらなる国際交流が期待されます。